

人工言語学研究会著 2012年3月4日初版

語法論

人工言語の见えない心臓

●エスペラントと語法

人工言語にとって最も見逃されやすく重要なのは、語法である。

エスペラントは西洋語の語法を踏襲した。

東洋人のエスペランティストはおしなべて西洋語に精通した識者である。よって西洋語の語法に合わせるか母語の語法に合わせてエスペラントを使う。

芸術言語は文化を構築し、国際補助語は文化を漂白する傾向にある。

文化については構築しようが漂白しようが一向に構わない。文化制作から逃げようと思えばいくらでも逃げられる。むしろ国際補助語については漂白、すなわち捨象すべきとすらいえる。

だが語法はそうはいかない。いずれの場合でも、オリジナルの語法制作を放棄するわけにはいかない。

アプリアリであろうとアポステリアリであろうと、オリジナルの語法を持たねば、異なる母語話者間で意思疎通を正確にすることはできない。

エスペラントはこの問題に対処しなかった。西洋人と西洋に傾倒した東洋人によって培われてきたためである。

現在エスペラントの語法は事実上漠然とした印欧語族の言語群の語法の踏襲であり、無意識に形成されたアポステリアリな語法である。

ザメンホフがしっかりと語法を設定しなかったことが、エスペラントの欠点である。

2012年現在においてでさえ、アメリカの人工言語関連の掲示板に顔を出すと、東洋人が来るのは珍しいと物珍しがられる始末である。ネットが普及しても西洋と東洋の文化的な隔たりは大きい。

ということは100年以上前に作られたエスペラントが西洋と東洋の語法を合わせて検討しなかったのは仕方ないといえる。というか時代的に考えて、そもそもザメンホフには無理である。

●アルカと語法

一方、アルカは西洋から東洋まで幅広い母語話者によって構築されたため、早くから語法の問題に直面していた。

20世紀後半において西洋と東洋が接触すると、大抵は東洋人が西洋人に擦り寄るのが現実だった。

西洋のほうがおしなべて経済力も軍事力も科学力もあり、東洋は西洋に対する憧れを少なからず持っていたので、仕方がないことであった。

当時の日本からアメリカへ留学する率とその逆の率を比べても、そういうことはすぐ分かる。

そんなご時世にもかかわらず、アルカは1991年という早い段階から西洋主導のやり方に侵されていなかった。

最も原始的なアルカは花言葉を使ったアプリオリの暗号であり、次に原始的なアルカはこれもまたアプリオリな暗号であった。

後の1991年にできたアルカは日本語とフィンランド語のピジンからできた言語であった。どちらも印欧語族でない点で、最初からやや特殊であった。

その後、西洋人が中心ではあるものの、母語の異なるメンバーが流入した。確かに西洋人の割合は多かったが、その集団の代表格の一人であった私が日本人だったため、日本語圏の力が強かった。

つまりアルカは西洋語、とりわけ印欧語族の語法に浸食されなかったということである。

●語法問題：問題に気付いた言語屋と気付かなかった言語屋

さて、90年代なかばになってメンバーが急増すると、語法が問題となった。

なにせ様々な母語を使う話者の集まりなので、同じアルカを使って話したところで、語法の食い違いのせいで意図が正確に通じないのである。

例えば「公園」はある言語話者にとっては「広い」ものだし、ある言語話者にとっては「大きい」ものである。

同じく「川」はある言語話者にとっては「幅広い」ものだし、ある言語話者にとっては「大きい」ものである。

エスペラントでは英仏の *large* や英語の *vast* を参考に、「広い公園」を *larĝa parko* や *vasta parko* などと言う (*vasta parko* のほうが一般的)。そのまま印欧語族の語法を踏襲している。

英語にもフランス語にも日本語の「広い」にぴったり当てはまる単語は存在しない。そしてエスペラントはやはり西洋語の一種だけあって、日本語の「広い」にぴったり当てはまる単語を持たない。

もし日本人がエスペラントを使うなら、結局は西洋語圏の語法感に合わせるか、日本語式の発想の誤ったコロケーションを使うしかない。

これは国際補助語としてはゆゆしき問題である。なにせユーザー間で語法が統一できていないのだから、意思疎通が正確にできないのは火を見るより明らかである。

国際補助語としては語法が特定の自然言語に依存しているのはよろしくない。ユーザーにとって不公平感があるからである。芸術言語ならまだ良いが、国際補助語では致命的である。

にもかかわらず、この語法問題があまり注目されていないのはなぜか。それは異なる母語話者が対等な立場で特定の人工言語を使用した実績がないためである。

簡単にいえば、言語を作るだけ作って使用実験をきちんと色んな外国人との間で何年もわたって行なってこなかったから、語法問題の存在そのものに気付かなかったのである。

エスペラントの場合、西洋人は西洋語の語法を、東洋人は西洋語が既にできる識者が多いので西洋語の語法を使用する。西洋人と東洋人のユーザーの関係が対等なものになっていない。

結局東洋人が西洋人に合わせているというのが実情である。それもそのはず、2012年になってもアメリカの人工言語の掲示板で日本人が珍しがられるのが人工言語界の実情なのだから。

思うに、2012年現在、地球上で異なる多数の母語話者が西洋偏重の語法なしに人工言語を使用した例は、アルカしかないのではないだろうか。

なぜそう思うかという、あらゆる人工言語が語法についてあまりにも考察をしていないためである。

以前日本人の人工言語に関する知識があまりに貧弱なため、義憤でかつての新生人工言語論を作ったときと似たような気持ちがある。

ざっくばらんに言うと、「お前ら語法なめすぎ。絶対その言語使ってないだろ。外人どもと使い合っつりゃ、絶対語法に目が行くはずなんだよ」という思いで満ち満ちている。

正直、本稿のタイトルを「語法論」ではなく「語法なめんな」にしたかったくらい、憤りがある。

アルカの場合、90年代中頃には既に語法が大きな問題となっていた。

ユーザーによってコロケーションが全然異なることなど日常茶飯事で、相手の言っていることを理解するのが難しかった。

我々日本人は「最後の日曜日」と言われると人生最後の日曜のことかと勘違いするが、これは単なる last Sunday の直訳である。

last は最後という意味だが、最後なので「直近の」という意味もあり、先週の意味に繋がる。

相手が「先週の日曜日」という意味で喋ってきても、それを我々は「最後の日曜日」と受け取る場合がある。その場合、相手の意図を理解できるかどうかは怪しい。

アルカではこのような問題がたびたび起こった。もううんざりするほど起こった。正直当時の会話は実際には数割程度しかきちんと通じていなかったのではないだろうか。

アルカをメインでやっている人間が日本人の少年とフィンランド育ちの少女であり、サブでやっている人間が大半西洋人だったため、西洋語の語法が優勢になることがなかった。

優勢な語法が存在しなかったため、かえって共通の語法がなく、それゆえ語法が互いに通じないという問題が起こったのである。

パワーバランスに偏重があるエスペラントではこの問題が起こらず、逆にそれゆえに語法問題は捨て置かれたのである。

だが考えてみてほしい。国際補助語ならなおさら特定の言語の語法に依存してはならないのである。

芸術言語であるアルカが国際補助語よりも語法についてしっかり考察しており、よほど国際補助語然としているのは、皮肉にも面白い現象といえよう。

●語法問題の具体例

我々がアルカを運用していて語法の一致を見ないせいで意思疎通に苦しんだ例は枚挙にいとまがない。そのうちの一部を具体例として挙げる。

これらのコロケーションに関してあなたの言語がどう処理するか、またいかにエスペラントが考えなしに西洋偏重の語法を選択しているか、考えてみてほしい。

ページをめくるの「めくる」は何というか。では逆にページを戻す場合は何というか。

アルカでは、ページをめくるのは紙を裏返す動作だから、ページを裏返すと表現する。逆にページを戻すにはページを表返すというような表現をする。「紙を裏返す」という物理的な動作をそのままコロケーションに用いるため、「めくる」に比べてどの国出身の人間にも理解されやすい。

傘を差すの「差す」は何というか。アルカでは「開く」ないし「機能を発揮する」という動詞を使う。物理的な動作に即しているので万人に理解されやすい。

日本語では傘は「差す」ものだが、中国語では「打」するものである。一方、英語では open するもので、フランス語では ouvrir するものであるから、どちらも「開く」ものである。ではエスペラントはというと、やはりというか予想通り西洋語の語法をそのまま踏襲して *malfemi* すなわち「開く」ものである。決して「打」だの「差す」だのという表現は用いない。

他方、会議を開くの「開く」は何というか。アルカでは「催しを行う」という動詞を使う。これは「機能を発揮する」と同じ語形の動詞であり、汎用性が高い。

トイレを借りるというのが、トイレは借りるものなのか。いや、使うものである。返しもしないし持って帰りもしないので、この借りるは借りるの本来的な語義ではない。よってアルカでは「使う」と表現する。

大きな数は「大きい」のか。高カロリーは「高い」のか。大きな質量は「大きい」のか。風は「強い」のか。水の流れは「激しい」のか。

これらの表現に使われる形容詞は言語ごとに面白いほど食い違い、混乱の種となる。

これらに関して、アルカではいずれも「程度が甚大である」という汎用性の高い形容詞を用いて表現できる。

この形容詞のおかげで「大きい」や「高い」の比喩語義を宛てがわずに済み、万人にとって理解されやすい。

なお、語法はコロケーションだけの問題ではない。

「唇」はどこからどこまでの範囲を指すのか。英語の lip は日本語の唇より範囲が広い。あなたの言語ではどうなっているのか。

「水」は「お湯」と区別されるのか。英語や韓国語では水とお湯は単語レベルで区別されないが、日本語では単語レベルで区別される。

「書く」はどこからどこまでの範囲を指すのか。文字なら書くだろうが、絵なら描くではないか。絵でも書くという言語はあるのか。また絵文字なら書くなのか描くなのか。どこまでが書くの範囲なのか。そういうことも決めねばならない。

語法というのは単語の使い方であるが、具体的にはその単語の意味の範囲と、その単語が別の単語とどう組み合わせるのかという組み合わせの問題に大別することができる。

人工言語の制作者はこの2点について語法を設定していかなければならない。

どうだろう。あなたはきちんとこれらの問題について考えてきただろうか。一人で机上の空論で言語を作っているだけではぶち当たりにくい問題である。

仮にその言語を実用したとしても、日本人同士ないしアメリカ人同士などで用いていたら、共通の語法がある間柄なので、なかなかこの語法問題には気付きにくい。

アルカのように複数の異なる母語話者の間で長年使用してこそ気付く問題なのである。もちろん、本稿を読んだ読者はこの限りではない。そのような実験をすることなしに、この問題に気付くことができる。

・ 語法と文化

なお、「虹」は何色かというような問題は、語法半分文化半分といった問題である。語法の一つではあるが、文化寄りの記述であることは否めない。

語法記述と文化記述はしばしば弁別しづらい。それだけに文化を漂白し、語法だけをオリジナルで作るのはあまり現実的ではない。少なくとも不自然である。

それゆえ私は文化を漂白すべき国際補助語において自然言語並みの作り込みができるとは思っていない。

まず、文化を漂白するという行為自体がそもそも言語からして不自然な行為である。

その上、文化記述の一部が語法記述の一部と重複し、かつ語法記述に関しては捨象することができない事実を考えると、自然言語並みに作り込まれた国際補助語制作というのは現実的ではない。

言い換えれば、国際補助語では自然言語並みの作り込みを持った本格的な人工言語を作るのは不可能ではないかと私は考えている。

● 最大公約数的語義による語法の漂白

人工言語が語法において取るべき措置とはどのようなものか。

まず、アプリオリでもアポステリオリでもいいから、オリジナルの語法を設定すること。

エスペラントは成り行き任せで西洋語圏の語法を獲得したが、それは設定してそうなったのではなく、自然とそうなっただけである。

語法についてきちんと作者が考察しなかった時点で言語制作としては不十分である。「まあ言語学専攻でもない眼科医だからそんなもんだろう」と私は思っているが。

アルカは共通な語法がなかったので、必然的にオリジナルの語法を設定することになった。90年代中頃のことである。

最初は言語学の知識をメンバーが持っていなかったため、アポステリオリの語法であった。

しかしアルカの目指す方向性が異世界の芸術言語という設定に変化していくうちに、アプリアリで語法を持たせることになっていった。

次に、アプリアリでもアポステリオリでも、語法を漂白するか否か決めねばならない。語法の漂白は最大公約数の語義を得ることで実現できる。

例えば日本語では「広い」は面積に使うが、「広い手」とは言わず「大きな手」という。「広い」は単純に面積の甚大さを指す言葉ではない。場所性の有無など、いろいろな要因が絡まっている。また、「心が広い」などのメタファー語義もある。

一方、英語の *large* には「大きい」や「広い」の意味があり、フランス語の *large* には「幅広い」などの意味がある。

これらの言語の単語に共通する語義は「面積の甚大さ」であり、その語義が「広い」や *large* の最大公約数である。

複数の異なる母語話者で言語を使用する場合、最大公約数の語義を使用すると、誤解なく意思疎通できる。

我々は90年代中頃の混乱を経験し、最大公約数の語義を得ることで、ユーザー間で異なる語法を漂白して統一することができると知った。知識ではなく体得、環境への適応といってもよかった。

こうして現在でもアルカで「広い」を意味する *han* は原則として「面積の甚大さ」しか表さない。

従って手は「大きい」ものでなく「広い」ものであり、公園も「広い」ものであり、机も、そして場所性のない紙すらも「広い」ものである。

日本語は「広い公園」とは言えるが「広い紙」とは言わない。これは「広い」に場所性
が関与しているからである。

アルカの han は「面積の甚大さ」しか示さない——最大公約数的な語義しか持たない——
ので、「広い紙」といえるのである。

最大公約数的な語義であるから万人にとって扱いやすい。迷わずコロケーションを選択
することができる。

この特徴は本来国際補助語のエスペラントが持つべきものである。にもかかわらず芸術
言語のアルカが持っているのは皮肉であろう。本質的にはアルカのほうが国際補助語に向
いているのだ。

それはそうであろう。アルカの語法はエスペラントと違って多民族の青少年たちが泥臭
く青臭い人体実験の果てに構築したものなのだから。

西洋語偏重であったエスペラントに比べ、アルカは早くから語法の重要性に着目してい
た。西洋語に偏重しない環境では互いに語法やコロケーションが通じないことを肌で知っ
ていたからである。

なお、もし私が国際補助語を作るなら、語彙はアポステリオリにし、語法は最大公約数
を得るようにするだろう。

●芸術言語としての語法と語義の拡張

アルカは芸術言語なのにもかかわらず、むしろ国際補助語が持つべき漂白された語法、
すなわち万人にとって扱いやすい語法を持っている。

これは 90 年代のアルカが芸術言語でなく符牒言語、広義の国際補助語であったためであ
る。

しかし 2012 年現在は芸術言語なので、漂白された語法だけでは文芸的に物足りない。

そこであえてメタファーなど人間の認知能力を用いた比喩的な語義を単語に与え、語法
を漂白させない方向に傾けている。

例えば「語彙」は日本語では「大きい」ものだが、アルカでは「高い」ものである。

これは語彙というものを単語という煉瓦の集積で積み上げた塔と見なしているためである。

このような比喩的な語義を「高い」という単語に与えることで、脱漂白化し、芸術言語としての価値を高めている。

このような措置ができるのは、90年代から00年代前半に起こった語法の漂白により、メンバーがアルカ独特の語法を肌で覚えたためである。

アルカ独特のアプリオリの語法を獲得してしまえば、比喩語義を拡張してもユーザーは迷うことなくアルカの語法を使い続けることができるのである。

●語法制作の手順

アルカは符牒言語としての広義の国際補助語に端を発し、芸術言語に落ち着いた。その過程で語法も漂白から脱漂白の流れに移行した。

では芸術言語を作る場合、最初から脱漂白しておけばよいのだろうか。私はそうは思わない。

特にアプリオリで語法を組む場合、最初に漂白しておかなければ、恐らく作者の母語や習得した言語の語法をそのまま踏襲してしまう恐れがある。

アポステリオリならそれでもまあよいのだが、アプリオリだとわりと致命的である。

そこで一旦漂白作業をしておいて、そこから最大公約数の語義に比喩語義などの拡張語義を追加していくのが上等なやり方といえよう。

●世界の現実

このような人工言語の語法論を頭の中に入れ、体に染み込ませているのは、地球広しといえど我々アルカとその影響下の言語だけである。

アメリカで有名な人工言語制作者のマーク＝ローゼンフェルダーは、自身の言語が別の惑星の言語であるにもかかわらず、語彙がアポステリオリで地球のものになっているというご都合主義を採っている。

初心者でもすぐにご都合主義だと気が付きやすい語彙に関してすら彼はこの体たらくなのだから、語法などに気が回るはずもない。同様に、欧米の他の論客もここまで語法について経験し考察してはいない。

あなたは奇しくも世界中で最も先んじた、恐らく数十年から数百年未来の人工言語界の常識を今読んでいるのである。

せいぜい世の中の人工言語屋は「単語が西洋語に偏重しては不公平だから」などと言って、アプリアリな最小限の語彙数を持った工学言語を作るか、世界中の様々な言語から語彙を取り入れた国際補助語を作るかといった程度の貧弱な発想しか持たない。

さらにもっと下らないレベルでいえば、SVO だとか SOV だとか、あるいは NA だとか AN だとか、そういった語順のような基本的すぎる、ピアノのハノンレベルの問題でくだけ巻いているだけである。

私に言わせれば、語彙だ語順だといったレベルで言い争っているようではまだまだ浅い。その言語を実用していない、作り込んでいないのがバレバレである。

語法だコロケーションだといった細部に目が行くようになると、ようやく人工言語屋として上流である。

ところが欧米にも日中韓にもそのレベルに達している人間がおらず、それどころかそのレベルの存在自体に気付いていない、山の高みが分からない人間ばかりが跋扈している。

それが現実である。そして私はその情けない現実を変えたいと思っている。そうしてこの記事執筆した。本音を言えば、国語の教科書に載せたいくらい啓蒙性の強い文書だと考えている。

●人工言語の出来を評価する方法

人工言語の作り込みを評価する方法はいくつかある。

例えば辞書の語彙数と一語当たりにかけた時間の積算。語彙数が少なければ労力が少ないし、一語当たりの記述量や考察量が少なくても労力が少なく、そのような言語は粗製乱造でしかない。

単語数だけ無駄に多くて一語当たりの考察や記述が足りない言語は作り込みが足りない。作り込みは語彙数と一語当たりにかけた労力の積算で求められるものだからである。

このように語彙の作り込みで言語の作り込みを計るのはすぐ思いつくが、意外と思いつかないのが語法である。

語法をきちんと設定しているか。漂白作業の後に拡張語義を追加しているか。基本語を数十個でもさらってこの点を評価すれば、その言語がどれだけ作り込まれているか分かる。

さらにその作業が行われていれば、その言語は複数の異なる母語話者の間で実用された実績を持つことも推定される。

ただし、もしこの記事を読んだ人間であれば、複数の異なる母語話者の間で実用された実績を作らずとも語法を作り込むことができるので、その言語が複数の異なる母語話者の間で実用された実績があるかは推定できない。

●神話の中の語法

ここからは非現実的なファンタジックな話。お勉強ではない。

異世界の神話の中で、アルカの語法はどのような扱いを受けているのだろうか。

下記に語法の起源について述べた文章を挙げた。

アルカは語法に重きを置く言語だけあって、神話の早い時点で既に語法について言及している。

それほどまでに人工言語にとって語法というのは重要ということである。

なお、これはあくまで神話なので、エーステ理論というファンタジックな解釈を持ち出している。

神話上で地球の言語学をしているわけではない。その点には注意されたい。

ちなみに、下記程度の文章さえも訳すことのできない人工言語が多すぎるのも問題である。

というより、人工言語の99%は下記の文章が訳せない。そこまでの語彙がなく、文法も確立しておらず、語法も文化も設定されていない。

まったくゆゆしき事態である。

ーエーステ理論

彼らはある物質や概念が持つ本来的な名前を聞く能力を持っていた。エルトはエルトという名を定められるべく生まれた存在で、サールも然りである。ゆえに彼らは相手に自分の名を言われた際、それが確からしいと感じた。

これをエーステ理論という。エーステ理論では、あらゆる概念は固有の信号を持つ。その信号は0と1の集積であるが、音声や光の波長などに規則的に変換することができる。

例えば手を丸めて拳を作る。そして手首を含まずこの拳部分だけを指す概念の信号を得て、その信号を音声変換すると[baog]のようになる。正確にはその音声は[baog]ではない。人間が舌や口腔や肺臓を使って近似的に表現した音声が[baog]だというだけの話である。

エルトとサールは自分たちの身体が表現できるあらゆる音声を、30個の音韻に押し込めた。その30個の音韻とは、後のアルカの音韻にS,Z,H,Lを足した29音と、そこにシュワーを加えたものに等しい。

この音韻を使うと、拳を表す信号は/baog/と表現することができる。こうして神々は概念が発する固有の信号を音韻に変化し、語彙を膨らませていった。

彼らは物だけでなく概念や行為や状態の名前も知っていた。例えば愛するという行為はttaaという名前を持っていることを知っていた。

上下のような形のない概念や、大きいのような形のない状態についても適切な名前を知ることができた。こういった概念の名前を彼らはエーステと呼んだ（名詞以外の獲得）。

ー語法の起源

なお、拳に手首を加えると途端にその概念はbaogからかけ離れた信号を発するようになる。

愛するという行為も語法が変化するとエーステが変化してしまう。エーステは少しのことで変化しやすい。

例えば水のことはエステで eria というが、これは 0 度の H₂O のことであり、泥が入ったり不純物が入ったり気体になったり液体になったり温度が変わったりするとエステが途端に変わってしまう。

これではエルトとサールが日常生活をしていて目にする水は全て異なったエステで呼ばねばならない。このような言語は不便であると彼らは感じた。

そこで彼らは eria の温度や多少入った泥などの不純物を気にせず、すべて共通してこれらを eria と呼ぶことにした。つまり特定のエステで他のエステを代表させることとした。つまり一般的に水だと思われるものをすべて eria と呼んだわけである。

このとき初めて語法の概念が生まれた。eria は少し泥の入った水と真水の両方を指し、水とお湯の両方も指す。しかしワインや果汁は eria ではなく、eria とは弁別される。つまり eria が何を指して何を指さないかという語法が生まれたわけである。

あらゆる概念をエステで表現すれば語法は不必要であるが、単語に意味の範囲を与えたことで語法が発生した。

-eejfebccp

læj fcl enuc len jep ejf lino le fæl ɔ scd illu fcl. elf ef lil le fcl ejf nel elf lino lɔ ɔ jil. iljon læj nil ejfacf f'ole ef noz cd ejfcl yə cle.

el ɔ fæ ef eejfebccp. lif eejfebccp, cl scd fcl fel enfi. fæ fel ef lo ɔ 1. el dcyə jen fæ fel ɪ əz ap oen hij zeffel.

pe lo bɔɸ uɔl bcl ij. scd nel fə uɔl fclen finl fcl le fel, jee el lɔd jen ə nel [bɔɸ] ɔl dcyə fə fel ɪ ə. lɔj, fə ə ne [bɔɸ]. fɔ, ə yaf lo le fcl uejn, læscd, jɔd oen ef dɸəl ɪ ə nel [bɔɸ] ni.

elf ɔ jil uiscɔ ʔ0 lɔd cf cl aeef le nɔje əz jen ɔn dɔn nɔjel. fæj ʔ0 lɔd ef lɔd f'ipɔ le ləno jcl jefi, əl lɔd nel ʈ, ʒ, X, T, loɔl ɔ nel jeeʈuejɔ.

el uɔl jen fel l'ej bɔɸ lel /bɔɸ/ ɔn fæj lɔd. yin ɔn fæj lɔd, dcyɔl jecn jɔɔɔ cluef uɔl dcyəno fel enfi le scd illu fcl ɪ le lɔd jecn.

læj jep ejf lino f'en fæl hɔf fel scd, jɔl, ɔlɔ fin. ɔui læj jep jɔl nel fccilj fcl ejf lino nel "fcci".

